

Title	一九三〇年代における日本のイスラーム政策とオスマン皇族
Sub Title	Japanese policy for the Muslims in the 1930s and the Ottoman princes
Author	デュンダル, メルトハン(Dtindar, Merthan)
Publisher	三田史学会
Publication year	2007
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.2/3 (2007. 1) ,p.53(233)- 85(265)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070100-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九三〇年代における日本のイスラーム政策とオスマン皇族

メルトハン・デュンダル

はじめに

アジア大陸の西に位置するトルコと東の日本との関係は、両国の距離が離れているため比較的遅く始まった。

二〇世紀最初の四半期は、オスマン帝国にとつては滅亡期にあたり、日本にとつては高揚期であった。ヨーロッパ列強の攻撃に苦慮するオスマン帝国は、東方において著しい発展を見せ始めた日本に対して関心を示すようになった。しかし、相互に友好関係を築くことを希求したにもかかわらず、当時の政治情勢はそれを許さず、両国が接近する道は閉ざされていた。一八八九年、アブデュルハミト一世が親善を目的として日本に派遣した軍艦エルトゥールル号によつて先鞭がつけられたトルコと日本との関係は、彼の死後約二五年を経てその血を引く孫の

アブデュルケリム来日によつて新たな展開を迎えることになる。

本論は、満州国成立後の一九三三年におこなわれたアブデュルケリムの来日問題を日本の対イスラーム政策、東トルキスタンをめぐるトルコ＝日本関係の文脈のなかで明らかにしようとするものである。これについて論じる前にあらかじめ近代における日本とイスラーム世界の関係史を簡単に振り返り、それを整理した上で論じていくことにしたい。

1 帝国主義の道を歩む日本とイスラーム世界

一八六八年の明治維新以後、日本は封建的な幕藩体制から天皇制を柱とする中央集権体制へと移行した。⁽¹⁾これには流血の衝突を伴つたが、開国の結果、学問、技術、

貿易、軍事の諸分野において先進的なヨーロッパ諸国の水準への到達をめざす新興勢力として歴史の舞台に登場した。⁽²⁾とくに経済の分野において著しい発展をみせた日本は、市場をめぐつて東アジアにおける他の地域大国であるロシア帝国、清と敵対し、その帰結として一八九四一一八九五年に日清戦争、それに続いて一九〇四一一九年五年に日露戦争が勃発した。

これら二つの戦争に勝利した日本は、一躍世界の注目を浴びたが、とりわけロシアの支配下で抑圧され、呻吟するムスリムやトルコ系諸民族が日本に寄せる期待は大きかつた。

日本はこのような関心と共感を得たのみならず、勝利したことによつてアジア大陸で新しい領土と經濟的権益も獲得した。⁽⁴⁾日本が得た新たな地位を守つていくための基本的な要件の一つは勢力圏の拡大であつた。なぜなら二つの戦争において日本は清やロシアに勝利したとはいえ、軍事、經濟、政治、いずれの面でもまだアジアにおいて決定的な力をもつに至らず、その足場を固めるためにも勢力圏を広げることが必要であつたからである。

日本が列強と肩を並べていくもう一つの道は、イスラーム世界を味方につけることであった。当時、約三億二

〇〇〇万人の人口を有するイスラーム世界は地理的に広大で、戦略的にも經濟的にも非常に重要なところであつた。⁽⁵⁾信仰の面のみならず、同時に社会的にも政治的にも一つのまとまりを成すイスラームの連帶精神は、世界のムスリムを人種、民族の違いを越えてたがいに緊密に結びつける役割を果たしていた。これからパレスチナやモロッコのムスリムが直面する困難な状況がシベリアやフィリピンのムスリムのもとにも伝えられ、影響を及ぼすということはよくあることであつた。

「ムスリムは、たがいに兄弟である」という論理は、アルバニアから中国にまで広がるイスラーム世界を政治的に統合していく際に非常に大きな力を發揮する武器になり得る。これらのこと念頭に置きながらイスラーム世界において尊敬を勝ち得ようと努める国が覇権争いにおいて大きな利益を手にすることは間違いない。一九世紀の最後の四半世紀においてイスラームが有するこの特質に気づいた日本は、二〇世紀初頭においてイスラーム世界から友愛と尊敬を得ることにおいてヨーロッパ列強に比べて一步も二歩もリードすることができたのである。⁽⁶⁾

日本にとって最も近い隣国であるロシアと清の領内にはそれぞれ戦略的に重要なと思われる地域に数多く

のムスリムの少数民族が住んでいた。これらの人たちは長い歴史の中で絶えず統治を周知徹底させようとする政府と軋轢、衝突を繰り返していたが、日本はこれらムスリムの少数民族を自分の側に引き寄せるこことよつて自己の勢力を拡大する野望を実現することができると考えていた。

ロシアと清以外の地域、国にも日本が利用できると思われるムスリムが多数、存在していた。たとえば、経済的な価値が高く、それゆえにヨーロッパの諸列強の植民地統治の下に置かれたフィリピン、マレー半島、インドネシア島嶼部のようなところには多くのムスリムが生活していた。また、インドには膨大な数のムスリムが住んでいた。彼らはヒンドゥー教徒との関係で言うと少数民族と見なされるが、イスラーム世界全体の中では見るともっとも人口の多い集団を形成していた。このインドのムスリムを味方につけるということは、日本にとってイギリスのアジア支配にくさびを打ち込むことに他ならなかつた。さらにアフガニスタン、イラン、イラク、トルコと良好な関係を築いていくことは、日本にとってそれらの国がロシア、イギリスに対する防壁になるという利点があつた。⁽⁷⁾

日本が中東やアフリカのムスリムと結ぶ関係は、大きな貿易上の優位を確保する一方、ヨーロッパ帝国主義の足下を脅かし、それを不安定にする可能性ももつっていた。⁽⁸⁾日本はイスラーム世界の民族主義者、イスラーム主義者たちがつくる組織、団体と関係を築いていくにあたって、戦略的な観点からも心情に訴えるという点からも有利な状況にあつた。日本人は親密な関係をつくりあげることを目的として行うプロパガンダにおいてしばしば反ヨーロッパ的な言辞を多用した。さらにムスリムは元来、アジア主義の信奉者であり、ヨーロッパ人とは人種、民族的にはまったく違う存在であると強調しながらその自尊心をくすぐり、彼らを日本の側に引き寄せるということも行つていった。さらに、日本の反共産主義的な言動もムスリムたちの宗教的な琴線をいたく刺激し、その心をつかむ上で有利に働いていた。

日本を優位に立たせた要因として古来から連綿とつづく宗教の本質によるところも大きかつたことを指摘しておかなければならない。すなわち、その権威をいかなる聖典にも求めず、信条的には融通無碍な面をもつ神道の伝統が日本人の間に生きていることがイスラームとの関係を良好なものにしていく上で役立つた。神道は国家と

天皇によつて象徴化されてきた。これによつて國に奉仕する日本人は、個人的な信仰に抵触することなく政治的には神道主義者としての体裁を無理なくとることができた。さらに神道の信仰は、郷土愛（祖國愛）の基本原理のひとつをなしていた。キリスト教がこの種の原理と対抗していくことは非常に困難であった。

日本はこのような宗教的な寛容性をもつてムスリムに對して影響力を及ぼし、イスラームを弘布しようとする人たちの注意を引こうとした。こうしたなか天皇がイスラームに好意を寄せ、改宗したという噂が流れ、数百万の純粹にイスラームを信仰する者たちのなかには日本の天皇がカリフになつてイスラームは世界の中で最大の勢力になると本氣で考へる人たちも出てきた。⁽⁹⁾

日本のイスラーム政策が成功するかどうかは、変化する政治的バランスに柔軟に対応しながら新しいやり方をいかに打ち出していくかということに懸かっていた。たとえば、帝政ロシアの時代には帝国内の民族的な対立をうまく利用してイスラーム政策が行われた。しかし、ロシア革命後、社会主義政権が宗教に対して弾圧策をとるようになると、それをとらえて、逆にイスラーム政策を打ち出していくことも行われた。

他方、トルコに対する日本のイスラーム政策の変化に目をやると、オスマン帝国末期に影響力が強かつたパン・イスラーム主義に翳りがさすと、新たに民族主義のなかでも極端なかたちでウラル＝アルタ語系諸民族の優秀さを説くトゥラン主義の風潮に肩入れすることが行われた。民族主義はイランとアフガニスタンで有効な武器になり得たが、インドのムスリムたちの間では実際の政治動向によつてはブーメランとなり得た。⁽¹⁰⁾ このため印度においては、民族主義に一方的に頼るのでなく宗教問題をうまく利用しながら日本の影響力を強めていくという目標に達する道も探られたのである。

日本はこのような状況を勘案しながら政策を立てていこうとし、それは部分的に成功した。日本がイスラーム世界に対して影響力を強めていこうとする取り組みは、次の三つの時期、すなわち（1）一九〇五年までの時期、（2）一九〇五年から一九一八年までの時期、（3）一九一八年から一九四五年までの時期に分けて考察していくことが可能である。

ン・イスラーム主義を活性化しようとしていた時期にあたる。ロシアにおいてはトルコ＝ムスリム系の諸民族が自分たちの土地を求め、その所有権を主張する動きを見せていて、このことは日本の対イスラーム政策にとって有利な状況を生んだ。オスマン帝国が目ざしたのは、ロシアの南部国境地域と東部諸地域に広がるアゼリー、タタール、バシュキール、カザク、クルグズ、テュルクメン、ウズベクといったトルコ系諸集団の中に宗教的な連帯感情に訴えるパン・イスラーム主義を浸透させ、あわせて民族的な紐帯を強化してトゥラン主義にもとづく政治的統一を創り出すことであった。このような目的をもつて一八八〇年以降、オスマン帝国からロシアへ、さらにムスリムが住む中国各地にプロパガンダを行う工作員が派遣されたのである。⁽¹¹⁾

日本は一八九四—一八九五年の日清戦争に勝利すると、アジア大陸に日本を好意的な目で眺め、事あればたがいに手を取り合つて連携しようとするムスリムが多くいることを発見した。⁽¹²⁾ 日露戦争（一九〇四—一九〇五年）後に威信と信頼を増した日本は、白人ではないムスリムの眼前に新しいチャンピオンとして登場した。かくして日本は、イスラーム政策をよりきめ細かく浸透させること

を開始し、ムスリムたちに対して公然と接近しつつ時は文化的活動を装いながら政治的企図を実現していくのである。⁽¹³⁾

この他、新聞も日本が宣伝活動を行っていくにあたつて影響力のある手段となつた。一九〇六年に日本の天皇がムスリムになつて、イスラームが日本の国教として宣言されるとの報道が発表された。インド、エジプト、トルコでは大きな熱狂が生じ、イギリスやドイツのような国々でも反響があつた。さらに、日本でムスリムの学校、イスラーム関係の文化的な協会が相次いで設立され、イスラームの出版物が発行されるとの報道も広まつた。⁽¹⁴⁾

新しいイスラーム政策の庇護者、支援者は、一九〇一年創設の黒龍会のような大亞細亜主義の思想を標榜する狂信的な国家主義者のグループであつた。その指導者は頭山満、内田良平などである。ムスリムの間ではトルコ系タタール人出身のアブデュルレシット・イブラヒムの名前を思い起こす必要がある。彼が日本で頭山満、内田良平、犬養毅⁽¹⁵⁾といった人物と一緒に亞細亜義会を創設し、「回教の誓い」⁽¹⁶⁾をしたことは、超國家主義を奉じる日本人とムスリムが運命共同体に入つたことの何よりの証拠である。

かくして日本のイスラーム政策のなかにきわめて影響力のある手段としてトルコ系タタール人たちが入つてくるようになった。彼らを取り巻く条件は日本の都合で変わつたが、一九一七年のロシア革命によつて困難な状況に陥つたトルコ系タタール人は、望む望まないにかわらず日本の国家主義者たちと協力することを余儀なくされた。一九一八年以降の日本の対イスラーム政策に組み込まれることになつたトルコ系タタール人たちは、一九四〇年代まで重要な役割を演じることになる。

一九一七年のロシア革命後の内戦期にアメリカ、イギリス、イタリア、フランスとともにシベリアに出兵した日本は、白系ロシア軍将校たちと接触をはかりながら彼らを軍事的、経済的に支援し、日本の傀儡とすべく努めた。⁽²⁰⁾ コルチャーキ提督、アタマン・セミヨーノフ、カルムコフ大尉といった司令官たちの指揮下にあり、反ボリシェヴィキを奉じる白露軍に身を置くトルコ系タタール人たちと関係を深めたのは、まさにこの時期のことである。この関係はヨーロッパ列強の圧力によつて日本軍がシベリアから撤兵した後も続いた。この時期はまた、日本の大外政策を策定する者たちによつてトルコ系タタール人がアジア大陸のムスリムたちの中で潜在的な影響力を

を有することが強く認識された時にもあたつていた。反ボリシエヴィキ軍が敗北すると、これらの軍に身を置くトルコ系タタール人は、一九一九年以降各地に散らばつていつたが、その一部は満洲や日本軍が支配する地域に逃れていつた。⁽²¹⁾ また、これとは別の移動の波が、一九二〇—一九二一年に起きた大飢饉の時期に生じた。トルコ系タタール人の多くは故郷を捨てて、ハイラル、⁽²²⁾ 奉天、⁽²³⁾ 満洲里、上海、大連、ハルビン等の都市に定住し、それらの地で相互扶助組織をつくつていつた。そして、これらの都市で形成されたコミュニティが日本への移住に際して次の飛躍のステップになつていくのである。

移住者たち、なかでも商売に従事するトルコ系タタール人たちは、家族を連れてアブデュルレシト・イブラヒムがすでに明治の時代に先鞭をつけた門を通つて一九一九年以降、日本統治下の朝鮮へ、さらに日本をめざして熊本、横浜、神戸、名古屋などに住みつくようになつた。⁽²⁷⁾ 初期のうちは横浜に他の都市に比べて多くの定住者を擁するコミュニティーがつくられたが、その後時が経つと東京、神戸、名古屋のトルコ系タタール人の数が増加した。

故郷から遠く離れたところでまったく新しい生活を始

めることになつたトルコ系タタール人たちが中国、朝鮮から日本に移住した理由には、よりよい生活とより多くの利益を得られる商売への期待があつたが、これとは別に政治的な理由もあつた。それは日本が一九一八年以降、新たに策定したイスラーム政策と密接に関わるものであった。

一九二四年は、在日トルコ系タタール人にとって転換期といえる年である。この年にトルコ系のバシュキール人で名家として知られるクルバンアリー家の一員でもあるムハンマド・アブドウルハイ・クルバンアリーが東京にやつてきた。⁽²⁸⁾ 彼は内戦期に反ボリシェヴィキ軍と協力し、その後一緒に極東、日本軍支配下の地域に移動した。そこで日本との関係をつくつたクルバンアリーは、大連で日本によつてつくられた南満州鉄道で通訳として働いた。⁽²⁹⁾ アメリカ諜報機関の報告書によると、クルバンアリーは日本の資金を得て働く諜報員であつたといわれ、満洲では日本の特務機関においてロシア語とトルコ語を教えていた。

一九二四年、クルバンアリーは彼を支持する者たちと東京にやつて来たが、彼の東京での行動を調べてみると、日本人たちはクルバンアリーを日本のイスラーム政策を進めための道具として利用したと見ることができる。クルバンアリーおよび彼のグループがやつて来ると、日本でのトルコ系タタール人の数も増加し、これによって自分たちが続けてきた暮らし方にも変化があらわれる。一九二五年一月以降、組織的に金曜礼拝が行われるようになると、同年「東京回教団 (Mahalle-i İslamiye)」が設立された。東京の上流階級が多く住む渋谷にひらくれた東京回教団とは、その原語である Mahalle-i İslamiye が示すようにトルコ系タタール人やムスリムたちが居住する地区の名前も意味していた。クルバンアリーは東京を始めとして日本や日本の植民統治下にある地域に居住するトルコ系タタール人たちを組織的に支配下に置こうと努めた。クルバンアリーは、この点に関して短期間のうちに成功したと言うことができる。⁽³⁰⁾

クルバンアリーを指導者と仰ぐトルコ系タタール人たちは、東京にあるコミュニティでの教育の必要性を痛感するようになった。このため一九三一年、代々木富ヶ谷一四六一番にあつた建物を購入し、学校として使い始めた。日本の有力者たちの援助によつてこの建物はクルバンアリーの名義で登記された。⁽³¹⁾ 校舎は当時高級官僚や富裕層が居住する、東京の高級住宅地の一角にあつた。開

校式には来賓多数が列席した。⁽³²⁾ 生徒たちの中には東京在住者以外に日本の別の都市で生活していた家族の子供たち、さらには朝鮮半島からはるばるやつて来たトルコ系タタール人の子弟もいた。

「回教学校 (Mektebi-i İslamiye)」の開校式については新聞や雑誌を通じて、ロシアや中国在住のムスリムにも伝えられ、日本のイスラーム政策にとつて良い宣伝材料になった。校舎の地下に印刷所が開設され、教科書の他にプロパガンダ用の雑誌、新聞、書籍が印刷された。⁽³³⁾ 一九二八年、トルコ共和国で文字改革が実施されると、使用されなくなつた古い印刷機とアラビア語の活字が新聞社から売りに出され、日本にもたらされた。これによつて「回教印刷所」がつくられた。⁽³⁴⁾ 一九三〇年一月以降、次々と多くの書籍が印刷され、それは中国からフィンランドまでトルコ系タタール人コミュニティーがあるすべての地域に送られた。

教科書および宗教書以外にもトルコ世界、イスラーム世界向けに日本のプロパガンダを行つていくため、一九三一年以降、雑誌『新日本通報 (Yangi Yapon Muhbir)』および新聞『眞理の宣言 (İan-i Hakikat)』の印刷が始まった。一九三四四年には日本政府の資金援助によ

りコーランが印刷され、エジプト、アフガニスタン、イラクを含む三三のイスラーム諸国にそれが送られた。⁽³⁵⁾

日本の首都東京での一連の出来事、トルコ系タタール人コミュニティの発展は、世界のムスリムたちの間によい影響を与えた。イスラーム世界の新たな守護者は日本であるという考え方すら定着し始めた。とくに一九三五年一〇月一日、⁽³⁶⁾ 神戸でモスクが開堂すると、全世界で大きな反響が起きた。⁽³⁷⁾ 神戸モスクの完成式典には、内外から多数の来賓が列席し、祝辞では日本がイスラーム世界に向けて行つたことに対し賞賛の言葉が相次いだ。モスクの開堂式にはインド・ムスリムのもつとも重要な指導者の一人であるミアン・アブドゥル・アジズも参加していた。

日本におけるイスラームに関する活動で転換点となるのは東京モスクの完成である。⁽³⁹⁾ 東京モスクは、世界各地から駆けつけたムスリムたちの参加によつて、かつ大きな式典によつて開堂された。この新しいモスクは、世界で、とりわけムスリムたちの間で大きな反響を呼び起した。この完成式典に関連して最も興味を引く点は、日本がロシア、中国、満洲在住ムスリムたちと取り結んだ関係において、また世界のムスリムとの関係構築において

て重要な役割を果たしたクルバンアリーが、建設に尽力した東京モスクの開堂式を見ることなく、その直前に逮捕され、日本から国外追放されたことである。⁽⁴⁰⁾

日本は、大亞細亞主義の理想を実現していくためにイスラーム世界が重要な役割を演じることに気づき、それにしたがつてイスラーム政策を策定していった。しかし、その内容と手段はその時々の状況に応じて少しづつ替えられ、改定された。一九三〇年代に入ると、従来のトルコ系タタール人に加えて元オスマン帝国の皇族を取り込みながらイスラーム政策を進めていくという新しいやり方が登場するようになる。次にこれについて見ていくことにしよう。

2 オスマン皇族と日本

オスマン帝国の皇族を国外追放に処する法律第四三一号が一九二四年三月三日、トルコ大国民議会で承認された。これにしたがつて男系皇族三六名、女系皇族四八名、その子供たち六〇名、総計一四四名が国外追放となつた。⁽⁴¹⁾国外追放決定後、皇族たちはパリ、ニース、ニューヨーク、ペイルート、カイロ、デリー、チラナ、ソフィアなど世界の各地に散らばつていった。海外では自分たちの

手で生活を切りひらいていかなければならなかつたが、多くは生活苦に陥つた。ある者は窮迫から逃れるためイスラーム諸国から送られた資金援助を甘んじて受け、ある者は娘や息子を外国の王室と通婚させて糊口を凌いだ。とくに女系皇族はイスラーム世界において政治的威信を得ようとするイスラーム指導者にとつて願つてもない相手であつた。

何人かの男系皇族（シェフザーデ⁽⁴²⁾）は、時として帝国主義諸国によつて政治目的に利用された。最後のカリフであったアブデュルメジト・エフエンディもその例外ではなくつた。彼は国外追放後、スイスのテリトにあるグランド・ホテルに滞在していた。ここで彼はイギリス、フランスの政府関係者、インドのイスラーム指導者として著名なアミール・アリーの訪問を受けた。彼らはエジプト国王ファード一世に対する興味深い提議書を携えてきていた。それは、元カリフがインドかエジプトに移り住み、ファード一世の助力を得てカリフ制を再興して欲しいとの要請だつた。⁽⁴³⁾しかし、アブデュルメジト・エフエンディはこの政治的な提案を受け入れず、一九三一年、娘のデュリュシエフヴァルをハイデラバード藩王国の王子アザム・ハンに、姪のニリュフェルを他の王子ムア

ツザム・ハンにそれぞれ嫁がることによつて窮状を開しようとした。⁽⁴⁵⁾

インドのイスラーム系の藩王室と結婚した別の皇族として、スルタン・ムラト五世の孫セルマがいる。⁽⁴⁶⁾ 彼女は、一九三〇年代に現在ネパール領内にあるバダルプール州のコトワラ藩王セイイド・サジド・ヒュセイン・アリと結婚した。カリフの息子であるオメル・ファルーク・エフエンディの三人の娘はエジプト王族と結婚した。⁽⁴⁷⁾ スルタン・アブデュルハミトの孫メフメト・オルハンの娘であるネジユラは、エジプトの王子サイード・ベイと、アブデュルハミトの息子アブドユルラヒム・エフエンディの娘ミフリシャー・セルチュクは王子ナイフ・ブン・アブドウッラーと、そしてアブデュルアジズの孫シユクリ工はクウェートのアミール、シェイフ・アフメド・アル・サバハと結婚した。⁽⁴⁸⁾ 男系皇族でもアブデュルハミトの息子メフメト・アビトはアルバニア国王ゾゴの妹セニイエと結婚した。⁽⁴⁹⁾

これらの婚姻は、オスマン皇族の生活上の困窮により実現したと考えられる。婚姻の相手側がそれを欲した裏には政治的な理由が潜んでいた。彼らは、オスマン皇族の娘婿になることによつて他のイスラーム指導者より一

段と権威が高まると考えていた。トルコ共和国政府もこれらオスマン皇族の婚姻について注意深く見守っていた。⁽⁵⁰⁾ オスマントルコ以外の別のイスラーム国家で再興するのではないかとの懸念があり、警戒心を強めていたのである。

これらの心配は必ずしも杞憂とはいえた。国外追放されたオスマン皇族のうちトルコ共和国においてスルタン制再興を企てる者がいたからである。イギリス外務省の秘密文書にはこの種の再興活動を試み、イギリスから援助を受けていた何人かの皇子たちについての記録が残されている。イギリス公文書館に所蔵されるグリーン・ペーパーという秘密文書の中に Prince Mahmud Shaukat Seifed-din なる皇子とおぼしき名前を見つけることができる。⁽⁵¹⁾ この人物は、最後のカリフ、アブデュルメジトの兄弟でスルタン・アブデュルアジズの末子であるセイフェッディン・エフエンディの息子マフムード・シェヴケット・エフエンディ（一九〇三—一九七三）であることは間違いない。

この皇子はオスマン帝国を離れてからイタリアを経てエジプトに移り住み、最後はフランスで死去した。文書から判明するかぎり、この皇子は一時期トルコ共和国に

おけるスルタン制の再興運動に関わっていた。一九四八年、マフムート・シェヴケト・エフエンディに対し建國が切望されていたパレスチナ国家の元首就任が懇請された。しかし、これを彼は拒絶したといわれる。⁽⁵²⁾

これ以前にも他の国の王に即位を懇望されたオスマン皇子たちがいる。たとえば、ブルハネッディン皇子の場合、一九一三年にアルバニアから、一九二一年にイラクからそれぞれ王位就任の要請を受けた。しかし、結果としてそれらの企てはいずれも成功しなかった。一九二八年にはメフメト・アビドやオメル・ファルークのようなオスマン皇子たちの名前がアルバニア国王の候補に挙げられた。しかし、おそらくは外交ルートを使つたトルコ共和国の必死の阻止工作が功を奏してこの構想は日の目を見ることがなかつた。⁽⁵³⁾

これは別に一九二五年、イギリスの支援を受け、アナトリア南東部および東部諸地域一帯を巻きこんで起こされたシェイフ・サイードの反乱に際して、ディヤルバルクルのウル・ジャーミではアブデュルハミトの息子メフメト・セリムをスルタン・カリフと見なし、その名において説教が行われた⁽⁵⁴⁾。この反乱に実際のところメフメト・セリムがどの程度関与していたのか定かではないが、

このような事件が起きたことに驚いたトルコ共和国の指導層は、以後、オスマン皇族たちの動きを神経をとがらせて逐次、監視するのを怠ることがなかつた。

一九三〇年代に入ると極東でもオスマン皇族の姿を目にすることができるようになる。この頃、押しも押されぬ地域大国となつていた日本は、オスマン皇族と関係をつけることに熱心に取り組むようになった。イスラームとカリフ制がとくに南アジアのムスリムに強い影響力を及ぼすと見た日本は、それを利用して大亞細亜主義の理想を実現することができると考えた。このためオスマン皇族に接近し、彼らを味方に引き込もうとした。これに関連する文書、文献には、直接的あるいは間接的に日本と関係があつたと思われる四人の皇族の名前が挙げられている。すなわち、①メフメト・アビド・エフエンディ、②ジエマル・エフエンディ（ジエマレッディン）、③マフムード・エクレム・ルザ、そして④アブデュルケリム・エフエンディがそれである⁽⁵⁵⁾。これについては以上のオスマン皇族のうち誰が、どのような形で日本と関係をもつにいたつたのかを見ていくことが重要である。

東トルキスタン、現在の中国新疆ウイグル自治区において一九三一—一九三三年、トルコ系ムスリムによつて

反乱がおこされた。この結果、一九三三年九月一〇日に東トルキスタン共和国、一九三三年一〇月一二日には東トルキスタン・トルコ・イスラーム共和国の建国が宣言された⁽⁵⁶⁾。多くの研究、文献によるかぎり、この蜂起から建国への過程において疑問とすべきところが残されているものの、日本の支援、関与があつたといわれる。またオスマン皇族がこれに関わっていたということも指摘されてい⁽⁵⁷⁾いる。

②のジェマル・エフエンディ、すなわちジェマレッデインもその一人で彼については、東トルキスタン・トルコ・イスラーム共和国を率いるリーダーであつたムスタファ・アリー・ベイがペシャワールで行つた会見に関連記事を見つけることができる。これは一九三四年にベルリンで刊行された「イエニ・ミツリ・ヨル（新民族の道）」誌に掲載、収録されている⁽⁵⁸⁾。このインタビューの中でムフタファ・アリーは、オスマン皇族の一人で、当時インドに滞在していたジェマレッデインが東トルキスタンに来る予定があるかないかを質問された。これに対してもフタファ・アリーはこう答えたという。確かに自分はジェマレッデインを東トルキスタンに連れて行くため、彼をデリーまで出迎えに行つた。皇子自身はカシ

ユガルに行きを強く望んでいた。しかし、建国された東トルキスタン・トルコ・イスラーム共和国は、共和制を支持する派とスルタン制を支持する派の二つに分裂していた。このためジェマレッデインのカシュガル行きは不可能となり、その計画は沙汰止みになつたという。

実現はしなかつたものの、以上の話の中で注目すべきことは、オスマン皇族の一人が東トルキスタンで独立が宣言された国の支配者として招請されたという点である。

スルタン・アブデュルアジズ一世を祖父にもち、その息子メフメト・シェヴケト・エフエンディを父とするジェマレッデイン（一八九一—一九四七）についての情報は以上のように限られ、また彼が日本との関係でいかなる活動をしていたのか、今まで依るべき確かな文書が見つかってはいない⁽⁵⁹⁾。しかし、日本との関係をかすかに窺わせるオスマン皇族が東トルキスタンの支配者に收まるうとする事実があつたことは、今後、さらに究明すべき問題だと思われる。

日本の外交史料館に所蔵される外交文書には、③のメフメト（マフムート）・エクレム・ルザという名前の皇子が登場する⁽⁶⁰⁾。駐ボンベイ駐在領事が当時の有田外相に送つた一九三九（昭和一四）年二月一九日付け第四七六

七号文書がそれで、メフメト・エクレム・ルザのことを
Late Commander in Chief Turkish Forces Kashgar とい
う肩書きで照会がされている。⁽⁶¹⁾この人物は東トルキスタン
において日本から多くの支援を受けて活動しており、
将来、新しい政府ないし国家が樹立される際は、情報収
集、その他の点できわめて有用な役割を果たすかもしれ
ないという報告がされている。

ハハハで重要なのは、この人物が誰で、彼を日本人に接
近させたのは誰かという点である。なぜなら私が調査し
た限りにおいてオスマン皇族の中にメフメト・エクレ
ム・ルザという人物は見つからなかったからである。⁽⁶²⁾もつと
むTurkey: Royal Family という見出しが付けられたイ
ギリス文書にはプリンス・エクレムという名が出てくる。⁽⁶³⁾
ただ、この人物がオスマン皇族であるかどうかは疑わし
い。

関係文書には往々にして誤りが見受けられる。たとえば、イギリス文書においてプリンス・サーミという名で
言及される人物がそれである。ただし、この人物がプリンスの称号を帯びることはおかしいと言わなければなら
ない。というのは、彼は実際にはダマト・フェリト・パ
シャの婿の子供であったからである。彼の母は、スルタ
ン・アブデュルハミト一世の妹で、ダマト・フェリト・
パシャの前妻であった。⁽⁶⁴⁾同じように別の文書もサーミ・
ベイの息子をプリンス・バハエッディン・サーミと書い
ている。⁽⁶⁵⁾これから(a)メフメト・エクレム・ルザは皇子
ではないがオスマン皇室と親類関係にあり、自らをプリ
ンスと名乗っていた、(b)プリンスでもオスマン皇族で
もない、(c)この人物がプリンスであることは間違いない
が、事情があつて本当の名前を名乗らなかつた、とい
う三つの可能性を想定することができる。

これとは別にプリンス・メフメト・エクレム・ルザと
いう名前で知られる人物がスルタン・アブデュルハミト
二世の妃サリハ・ナジエ・ハースムから生まれた息子メ
フメト・アビト・エフエンディ (⁽⁶⁶⁾一九〇五—一九七三)
であるという可能性も残されている。回想録に基づくあ
る研究によると、アビト・エフエンディは一九三五年以
降、日本の関係筋によつてトルキスタン皇帝の候補者と
して東京に招聘されたと伝えられている。⁽⁶⁷⁾しかし、アビ
ト・エフエンディ自身、回顧録を書いておらず、また書
くとも望まず、公文書も残されていないのでこの件が
事実であるかは依然として不明である。⁽⁶⁸⁾

ルコ・イスラーム国家建設に関与し、日本と直接関係を持ちながらその後押しを受けて東トルキスタン国家の皇帝に祭り上げられようとしたオスマン皇子が存在する。それがアブデュルケリム・エフエンディである。この皇子の父はスルタン・アブデュルハミト一世の息子セリム・エフエンディ、母はニリュフェル・ハーヌムであった。⁽⁶⁹⁾ アブデュルケリム、エフエンディは、一九〇六年ユルドゥズ宮殿で誕生した。ガラタサライ・リセで学んだ後、陸軍士官学校に入学するが、在学中にオスマン帝国が滅亡、トルコ共和国成立後の皇族追放によって国を離れることを余儀なくされた。父親と一緒にダマスカスからベイルート、アレッポへ転々とした生活を送り、一九三一年インドに渡つた。⁽⁷⁰⁾ 一九三三年日本から招請を受けたペイント、アレッポへ転々とした生活を送り、一九三一年印度に渡つた。最後にこの人物を取りあげながら一九三〇年代前半における日本とトルコとの関係史について考えていくことにしたい。

3 トルキスタン皇帝アブデュルケリム皇子

アブデュルケリム皇子はトルコを離れてからベイルートのガディール街においてマロン派のキリスト教徒で後

にムスリムに改宗することになるニメト・ハーヌムと知り合い、一九三〇年二月二十四日アレッポで結婚した。⁽⁷¹⁾ 彼の父はこの結婚に反対であった。このためアブデュルケリムは、新妻を連れてダマスカスに居を移した。しかし、そこでの生活は苦しく一度も自殺を図つたが、いずれも命は取り留めた。⁽⁷²⁾ 自殺の原因は、結婚に対する父親の冷淡さ、それに由来する生活上の困窮であった。一九三〇年に長男、一九三二年に次男が誕生するが、ダマスカスで発刊されていた新聞サウトウル・アフラール紙によると、一九三三年、それまでにもさまざま面で援助を受けていたハイデラバード藩王を頼つてインドに赴いた。⁽⁷³⁾

この旅はハイデラバード藩王の息子と結婚していたデュリュシェフヴァル（すでに述べた最後のカリフ・アブデュルメジトの娘）とカリフ制の復活をめざすヒラーフアト運動の指導者たちの招きにより実現したと思われる。アブデュルケリムはインドに暫く滞在するが、イギリス文書によると最終的にはインド総督府により国外に退去させられた。⁽⁷⁴⁾ その理由は、彼がかつてオスマン帝国においてパン・イスラーム主義を唱導していたスルタン・アブデュルハミト一世の孫であり、このことがインドにおいてヒラーフアト運動を再燃させるのではないかという懸

念がイギリスにあつたからである。また、アブデュルケリムはインドのムスリムあるいは別の人たちを通じて日本との関係を深めているのではないかというイギリス側の疑惑もあつた。この警戒心が彼の追放につながつたのである。

アブデュルケリムが誰を通じて日本人と関係をつけるようになつたのかについては、残された文書が少ないので解明するのが容易ではない。ただ、百科事典メイダー・ラルースの「ムフシン・チヨパンオール」の項目には、彼を通じてアブデュルケリムは日本人と関係を持つようになつたと記している。⁽⁷⁵⁾ この記事はとくに出所を明らかにして書いたものでなく信憑性も確かでないが、以下においてはムフシン・チヨパンオールの生涯を簡単にたどりながら、彼とアブデュルケリムが来日するに至る事情について触れていくことにしたい。

ムフシン・チヨパンオールはアナトリア中央部の町ヨズガト周辺で勢威を振るう名族チヨパンオール家の出身である。父親はメフメト・サドウクといい、宮殿に出自する将校であったが、バルカン戦争が勃発すると志願して出征、そこで命を失つたという。⁽⁷⁶⁾ イスタンブルのウシユクダルに生まれたムフシンは、父親の職務の関係から

幼少の一時期をオスマン帝国の宮殿で皇子たちと一緒に過ごし、割礼もそこで行つた。すでに述べたスルタン・アブデュルハミト一世の息子メフメト・アビト、孫のアブデュルケリムとも古くからのなじみで学友であつた。

祖国戦争期に起こされたチヨパンオールの反乱の頃、ムフシンはパリで建築学を学んでいた。しかし、間もなくして建築学科を中退、新聞学を学び直し、帰国後は教職についた。ただ、それも長く続かず、国外に出て新聞記者を始め、ルモンド紙など外国紙に記事を寄稿した。⁽⁷⁷⁾ トルコを出国してからのムフシンは、おそらくパリに居を定めながらアメリカ、アラビア半島、アフガニスタンなど世界各地を巡り歩く生活を送つていたものと思われる。

日本との関係は、おそらくパリの日本大使館を通じてできたと考えられる。一九三二年八月、滯在中のアフガニスタンにパリから来信があり、これにしたがつてムフシンは東京に向かつた。外交史料館所蔵の文書に残されている神奈川県知事の報告によると、ムフシンは一九三三（昭和八）年二月二一日午前一〇時、香港発の船で神戸に上陸した。⁽⁷⁸⁾ また同じ文書は、ムフシンがイスタンブルで発行されていた半官半民の新聞アクシャム紙の特派

員として来日し、東アジアと満州を視察するとともに日本問題について調べ、それを記事にしてトルコに送るためその便宜と許可を求めてきたと伝えている。⁽⁷⁹⁾ 同文書にはムフシンが神奈川県知事に対し五月に満州から日本に戻ると通知したことと記されている。またそこにはすでに触れた東京回教団の団長ムハンマド・アブドルハイ・クルバンアリーの名前も出てくる。ムフシンはこのアリート何時、どのようにして関係を持つようになったのかは残念ながらつまびらかにできない。

一九三三年五月は、日本とトルコ世界との関係において記憶に残る重要な時期であった。ムフシンの他にアブデュルケリムが五月二四日に東京に到着したからである。⁽⁸⁰⁾ 同じ年にアヤズ・イスハキー⁽⁸¹⁾とアブデュルレシット・イブラヒム⁽⁸²⁾も東京にやって来た。とくにイスハキーとイブラヒムが時期を合わせて来日したことは興味深い。イスハキーの日本訪問の目的は、極東のトルコ系タタール人たちを結集させることにあつた。これに対してイブラヒムは、トルコでの事実上の軟禁生活を逃れてパン・イスラーム主義運動を日本において再び組織するため招請を受けて東京にやって来た。

トルコ系タタール人の両巨頭の来日は以上のようにその意義をまとめることができるが、ここでは非とも考えておかなければいけないことは、すでに述べたアブデュルケリムを日本側で誰が呼び、資金的な援助をおこなっていたかという問題である。この点に関しては予備役の海軍中将であつた小笠原長生の存在が鍵であるという田中宏巳の指摘が重要である。⁽⁸³⁾ それによると、アブデュルケリムの日本冒険旅行は、東京在住のトルコ系タタール人の指導者ムハンマド・アブドルハイ・クルバンアリーが一九三三年二月二八日、小笠原長生提督をアブデュルケリムの秘書と自己紹介する人物と一緒に訪問したこと始まつた。クルバンアリーと秘書の訪問のねらいは、小笠原から彼らが立てた行動計画に対し援助を得ることであつた。この計画とは、もともと日本が満洲でおこなつたことをなぞるものであつた。その目標は、東トルキスタンでの蜂起によって樹立される国家の元首にオスマン皇族のアブデュルケリムを即位させることであつた。

この訪問の後、クルバンアリーは小笠原のもとを頻繁に訪れるようになる。⁽⁸⁴⁾ 小笠原日記には四月一八日夜、クルバンアリーがボリシンという名前の人物と一緒に訪ねてきて、ある人物の存在について話し合つたことが書か

れている。ある人物とは多分、アブデュルケリムのこと
で、当時平沼騏一郎の私設秘書を務めていた実川時次郎⁽⁸⁶⁾
によると、アブデュルケリムの来日と一年間の滞在に要
する費用として毎月千円の資金が必要だということも話
し合われたようである。

ところで、ここで名前が挙がっているボリシンとはム
フシンという名の音が誤って聞き取られ、書き留められ
た可能性が高いと考えられる。日本人の発音ではムフシ
ンはボリシンとして受取られることは十分にあり得るか
らである。この結果ムフシンがボリシンという形で書か
れてしまつたと思われる。小村不二男の研究によると、
小笠原を訪ねたこのボリシンとクルバンアリーの計画に
必要な資金を実際に提供したのは、小笠原自身でなく大
阪商船の堀社長と政友会の影の実力者森恪であつたとい
⁽⁸⁷⁾

この後、計画にしたがつてボリシン（ムフシン）はオ
スマン皇子のアブデュルケリムをシンガポールで出迎え、
五月一八日には神戸港に到着するという予定で日本を立
つた。小笠原はこれをうけてこの重要な情報を陸軍参謀
本部の小畠敏四郎に電話で知らせている⁽⁸⁸⁾。五月中旬神戸
に到着したアブデュルケリムは二一日、東京に到着する。

万歳を三唱しながら彼を出迎えたのは、衆議院議員、貴
族院議員、陸海軍の将官、国粹主義系の学生など全部で
百一百五十名からなる人たちであつた。朝九時東京に着
いたアブデュルケリムは警官に護衛されながらホテルで
旅装を解き、来客に接見した⁽⁸⁹⁾。その後明治公園の近く用
意された家に滞在した⁽⁹⁰⁾。東京滞在中は数々の史跡を訪れ、
有力者たちと面談し、頻繁に東京在住のトルコ系タター
ル人たちと会つた⁽⁹¹⁾。

この間、外国新聞とくにソ連において、アブデュルケ
リムの日本訪問、東トルキスタン共和国が建国された際
の国家元首就任についてのニュースがたびたび報じれる
ようになつた。しかし、彼はこのような報道で伝えられ
る内容をきつぱりと否定し、『ヤンギ・ヤポン・モフビ
リ（新日本通報）』誌において、次のような談話を発表
している。

「六ヶ月前、私は世界漫遊をめざす旅に出立し、東
京にも足を止めるに至つた。私の日本訪問については
嘘や根もない噂が飛び交つてゐるよう思われる。
たとえば、モスクワで出されている『プラウダ』紙は、
日本がパン・イスラーム主義運動の中心になり、私が

中国領東トルキスタンを支配しようと狙つてゐると報じてゐる。しかし、これらの報道は身命に誓つて事實無根であり、すべて根も葉もない悪意から出でてゐる。私はトウラン民族に属するトルコ民族であるのでトウラン主義者と親密にするのは当然である。何のやましいところもない。私は世界旅行の途次にたまたま日本に立ち寄つたにすぎない。日本を見物し、エルトゥールル号事件で遭難したトルコ人の慰靈碑に詣で、さらには明治天皇が巡幸されたところを訪ねるためにやつて来たのだ。東トルキスタンで起きていることに関わるつもりは毛頭ない。⁽⁹²⁾

このような談話を発表したにもかかわらずアブデュルケリムは、『パレスチナ』というアラブ新聞の伝えるところによると、七月に日本人将校二名、ムフシン・チョパンオールと連れだつて満洲に渡り、要人たちと面談した。九月には日本人将校二名が飛行機で東トルキスタンに入ろうと図つたが、中国当局によつて阻止された。将校たちのこのような計画を中国の新聞は、アブデュルケリムが東トルキスタンに入るための準備工作と見ていた。⁽⁹³⁾アブデュルケリムは、自分と日本に対して向けられる

批難に直面して窮地に立たされた。彼に対する警察の執拗な尾行・監視から守り、千駄ヶ谷にある私宅に匿つたのは、すでに渡航・滞在費用の面倒をみていた政友会の森恪であつた。⁽⁹⁴⁾アブデュルケリムの日本滞在は、一年間の予定であつたが、一九三三年九月二一日、ついに東京を離れることを余儀なくされた。⁽⁹⁵⁾一九三三年一一月一日付け『新晚報』紙は、「ムスリムの皇子」、すなわちアブデュルケリムが日本から上海にやつて来てイラン人経営のホテルに投宿したと報じた。一二月イギリス情報部将校ショーンバーグ大佐は、アブデュルケリムが東トルキスタンに入る予定だと本国に打電している。翌一九三四年三月二三日のタス通信のニュースは、アブデュルケリムが上海から東トルキスタンに行つたと報じた。しかしながら、三月二八日の中国ニュースによると、アブデュルケリムは依然として上海に滞留しており、日本人は彼を東トルキスタンをめぐるグレートゲームにおいて傀儡とすることはできないだろうと伝えた。⁽⁹⁶⁾

このように当時のメディアは日本出国後のアブデュルケリムの動静について憶測を交えながら情報を流していくが、この後も彼をめぐる報道は次のような形で続いた。四月六日付けイギリスのタイムズ紙は、アブデュルケリ

ムが知られざる場所に向かつて上海を離れたと伝える。⁽⁹⁸⁾

これに続けてイギリスの新聞は、ソ連軍が西トルキスタンにおいて大規模な軍事演習を行つてゐると報じた。⁽⁹⁹⁾ これには東トルキスタンにおける不穏な動きをソ連が牽制するという意図がこめられていたと思われるが、軍事演習に先立つ四月三日、日本当局はアブデュルケリムと日本が関係があるという噂は事実無根であるという声明を出した。⁽¹⁰⁰⁾ 五月初旬の報道によると、アブデュルケリムは東トルキスタンに樹立されたトルコ・イスラーム共和国首班サビト・ダモツラーに特使を派遣した。トルコの新聞も東トルキスタンで起きてゐる一連の蜂起、アブデュルケリムの動きに対し並々ならぬ関心を寄せていた。しかし、トルコの新聞のこの件に関する姿勢は、終始、慎重であった。⁽¹⁰¹⁾

一九三四年六月一二日、東干人がホーランに侵攻したことによつて東トルキスタン・トルコ・イスラーム共和国はあつもなく潰滅した。⁽¹⁰²⁾ これにもなつてアブデュルケリムの計画はもろくも崩れ、水泡に帰した。極東に馳せた彼の夢はこのようない結末に終わり、再び森恪の援助を得てアメリカ合衆国へと旅立つていった。⁽¹⁰³⁾ しかし、そこが終焉の地にならうとは予想だにできないことであつ

た。

一九三五年八月四日付けのニューヨータイムズ紙は、「オスマン皇子、ニューヨークで命を絶つ」という見出しを掲げてアブデュルケリムが、ブロードウェイ43番通りにある安宿Ⅱホテル・キャデラックの一室で自殺したと報じた。アブデュルケリムの遺体は、足を下に垂らすかたちでベッド横たわっていた。右頭部には32口径の拳銃で撃ち抜いた思われる弾の跡があり、傍らには拳銃が落ちていた。ポケットにはわずか75セントしか残されていなかつた。アブデュルケリムは、自殺する数時間前に部屋に入り、朝五時に起こしてくれるようについてメモを残していた。しかし、電話をしても応答がなく、不審に思ったホテルの従業員が部屋に入つて、はじめて冷たくなつてゐるアブデュルケリムの遺体があることに気づいたのである。⁽¹⁰⁴⁾

アブデュルケリムは、一九三四年九月二ニューヨークに来てからしばらくの間カーディル家の世話をうけながら一緒に暮らしてゐたと思われる。なぜ自殺したのか、その動機についてはニューヨーク市警のヴァレンティン警部に宛てて書かれたトルコ語の手紙から推察することができる。残された遺書ともいふべきメモには、オスマン

家の再興と東トルキスタン皇帝になる夢を実現すべく奔走してきたが、疲れから病に伏すようになった。最後に一縷の望みをかけてある裕福な女性に結婚を申し込んだがそれも断られ、後は自ら命を絶つこと以外道が残されていないことが走り書きにされていた。⁽¹⁰⁾

二十九歳で命を絶った若き皇子アブデュルケリムの遺体は、オスマン帝国時代にトルコ領事館で勤務したことのある弁護士ダッドリー・F・コスターによつてベルヴュー・モルグに移された。コスターは、新聞社に対して行つた記者会見でアブデュルケリムの父親セリムから電報が送られてきたことを披露した。それに皇子にふさわしい葬儀と柩の搬送を執り行つて欲しい、そのためにはいかなる出費も惜しまないという旨の依頼が記されていた。また、これとは別に自殺する数時間前、フォード自動車会社からアブデュルケリム宛に手紙が送られ、彼を同社の上海および東トルキスタンの代理人に任ずるという通知があつたことも明らかにされた。⁽¹¹⁾

葬儀にはアブデュルケリムの従兄弟オルハン、元トルコ領事シャーミール、画家ベツリデ・ユースフなどの友人、知己が参列した。祈りはマンダレイ導師によつて執り行われ、葬儀は二時間続いた。緑と白のリボンに包ま

れた棺は、九月七日、船でベイルートまで搬送され、そこで埋葬された。⁽¹⁰⁾

アブデュルケリム自殺のニュースはトルコの新聞にも掲載されたが、詳細については触れられなかつた。ウルス紙は「狂氣の沙汰とはいえない。アブデュルハミトの孫が自殺」と伝え⁽¹¹⁾、ジュムフリエット紙は「元皇子アブデュルケリム、ニューヨークで自殺。結婚を望んだ女性の資産を元に軍隊を編成し、トルコを征服しようともくろんでいた」と報じた。⁽¹²⁾

若き皇子の死亡をめぐつてはさまざまな憶測がされている。ユルマズ・オズトゥナは、アブデュルケリムがアメリカの諜報機関から脅迫を受けていたことが原因だと指摘する一方、ソ連諜報機関員が手を下して彼を殺害した可能性も否定できないとしている。これとは別にアブデュルケリムは日本人によつて殺害されたのだという見方もされている。二〇〇一年五月、ヒュリエット紙のコラムニストとして知られるムラト・バルダクチュとイスタンブルにある彼の自宅でおこなつたインタビューの際に、そこで知り合つたオスマン皇族出身のビュレント・オスマンも元皇族たちの間ではアブデュルケリムは日本人によつて殺害されたのだということがまことしやかに

囁かれていると私に語つてくれたことがある。⁽¹⁴⁾

二〇〇二年、私はニューヨーク市警に対しアブデュルケリムの死亡検案書と関係文書の閲覧を求める手紙を送った。しかし、市警からの回答は、すでに長い時間が経過しており該当書類を見つけることはできないとのことであった。死亡検案書や関係文書を発見することができれば、弾痕や目撃証言からアブデュルケリムの死亡原因についてより確かな考えを明示できるかも知れない。

おわりに

一九三三年五月一二日から九月一二日まで約四ヶ月間にわたるアブデュルケリムの日本滞在は、東トルキスタンをめぐる日本の傀儡国家構想と密接に関わっていた。すでに日本は一九三一年満州国を建国し、翌一九三三年には内蒙古を中心に蒙疆政権を成立させた。そしてそれに続けて日本は、一九三一年以来新疆省で起こされていた中華民国からの分離独立をめざすムスリム反乱を利用してそこに第二の傀儡国家をつくろうとしていた。こうしたなか東トルキスタン国家が樹立された暁に「トルキスタン皇帝」として即位させるべく白羽の矢が立てられたのが、オスマン皇族に連なるアブデュルケリムであつ

た。

この構想がどの程度具体化され、現実性を帯びたものであるのか、史料は必ずしも多くを語っていない。日本政府が直接この構想に関与したという証拠も今のところ発見されていない。しかし、小笠原長生、小畑敏四郎といつた海軍、陸軍の有力者、また森恪に代表される政治家がクルバンアリー、ムフシン・チヨパンオウルのようなトルコ系ムスリムとの接触を通じてアブデュルケリムの来日に熱心に動いたという事実には、日中戦争期における日本の東トルキスタンに対する関心の深さ、そこから由来するイスラーム政策の一端がよく現れている。

「トルキスタン皇帝」に擬せられたアブデュルケリムは、日本が対イスラーム政策を満洲、内蒙古からさらに東トルキスタンへと広げていくにあたって役立つ人物と考えられた。彼は血統という点から言うと、すでに述べたように一八七〇年代後半以降パン・イスラーム主義政策を積極的に進めたオスマン帝国のスルタン＝カリフ・アブデュルハミト二世の孫であった。この祖父の名声は、時代が下り一九三〇年代になつても東トルキスタンのみならずイスラーム世界全体においてなお人々の記憶に強く残っていた。日本はその血と威光を引き継ぐアブデュ

ルケリムを押し立てながらムスリムの広汎な支持を集めていこうとしたのである。

ただ、こうした日本の構想は東トルキスタンに重大な利害を有するソ連とイギリスのみならず、トルコ共和国にも強い警戒心を起こさせた。ケマル・アタテュルクは、新生トルコを建設していくにあたって政治イデオロギーの面ではオスマン帝国末期に鼓舞されたパン・トルコ主義を放棄し、アナトリアという地域に根ざす国づくりを進めていた。彼の頭の中にはもはや、東トルキスタンを含めたトルコ系諸民族の世界を政治的に統一するという野心はまったくなかつた。しかし、アブデュルケリムを「トルキスタン皇帝」に擁立して独立国家を樹立しようという日本の構想は、すでに一九一四年トルコで廃止されたカリフ制をもう一度復興させようという運動に広がつていく恐れがあつた。これにトルコは深い警戒心を抱いたのである。

こうした懸念は、トルコに日本を牽制する政策を引き起こさせた。トルコにとつて気がかりだつたのは、アブデュルケリムの日本招請計画に深く関わる在日タタール人コミュニティの指導者クルバンアリーの存在であつた。トルコは彼の影響力を削ごうと、一九三三年に日本を訪

問したアヤズ・イスハキーに対しても強烈な肩入れを行い、タタール人ネットワークの分断を図ろうとした。これまでクルバンアリーとアヤズ・イスハキーの対立は、タタール人コミュニティ内部における主導権争いとして論じられてきた面が強いか、アヤズ・イスハキーの背後にはトルコの影があり、その牽制政策の一環として見ていく必要があるようと思われる。

また、一九三三年東トルキスタン共和国が瓦解すると、その関係者の多くはパミール高原を越えてアフガニスタンに亡命した。その際、そこに駐在していたトルコ大使は助けを求めてきた亡命者に対して今後一切、日本に協力する行動を慎むよう勧告したという。これによく示されるように、トルコは東トルキスタンにおいて日本が進めようとするイスラーム政策に対して強い警戒心を持ち、これを阻止する対抗策をめぐらしていた。これは、トルコと日本との間における中央アジアをめぐるミニ・ゲームといえるものであるが、アブデュルケリムの来日問題はこうしたトルコと日本との間の国際関係の観点からとらえ直していかなければならず、今後の課題としたい。

- (一) R.H.P. Mason, *A History of Japan*, Tokyo, North Melborne 1973, p.258.
- (二) 横川幕藩体制から明治新体制へ移行する過程を記述する本は、Benedict Anderson, *Hayali Çemaalet*, Metis Yayınları, 1983, s. 110-115; Janet E. Hunter, *Modern Japonya'nın Doğuşu*, İmge Yayınevi, İstanbul 2001 が該当する。また田中長の著書に於ける出典は Robert E. Ward & Dankwart A. Rustow (ed.), *Political Modernization in Japan and Turkey*, Princeton University Press, 1964 を参照。
- (三) Selçuk Esenbel, "Japanese Perspectives of the Ottoman World," *The Rising Sun and the Turkish Crescent*, İstanbul 2003, p.29.
- (四) 田嶋義典著 *Public Record Office FO 371/477 The Official History of the Russo-Japanese War, Vol. I*, 1908 が外国人研究者の利用によって多く用いられる傾向である。
- (五) 田嶋義典著 *二十万人民によるスリーブ半島の人口*, Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, *Japanese Infiltration among the Muslims throughout the World*. O.S.S.R & A No: 890, p. 2, 1943 によると「*シベリア東北東のムスリムの数は、ソ連の総人口の約2%*」。
- (六) Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, op.cit., iii.

(七) 日本の中東戦略が直接結びついたのはなまかに、一九三三七年七月九日、アフガニスタン、イラン、イラク、トルコはサーザー・ペーム条約を結んで相互安全保障体制を敷きだしました。参照。

(八) Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, op.cit., p.4.

- (九) ハンブルクはいかに憚らしかったのか、かつてオスマン帝国の人々のあらざりやれなりに憚らなかったハムドニア。ハムドニアは“Osmanlı İmparatorluğu Teşkilatı Mahsus Reisinin Gizli Dosyalar,” *Tarih Sesleniyor*, Mart 1965, sayı 14, Nisan 1965, sayı 15, c.III, s. 1226-1229, 1255 を参照。
- (十) ハンブルクのイスラーム教徒の間で民族主義が強められ、日本がハッセンヒル影響力を行使する妨げにならぬよう、留め置かれた。
- (十一) ハンブルクは次の譜文を参照。İ. Süreyya Sırma, “Sultan II. Abdülhamid'in Çin Siyasetine Dair Bir Vesika”, *IX. Türk Tarih Kongresi*, c. II, Ankara, 1988, s.1111-1116; “Sultan II. Abdülhamid'in Çin'e Gönderdiği Enver Paşa Heyeti Hakkında Bazi Bilgiler”, *Atatürk Üniversitesi İslami İlimler Fakültesi Dergisi*, Ankara, 1980, s.159-183; “II. Abdülhamid'in Çin Müslümanlarını Sünni Mezhebine Bağlama Gayretlerine Dair Bir Belge”, *İstanbul Üniveritesi Edebiyat Fakültesi Tarih Dergisi*, İstanbul, 1979, s. 559-562; “Sultan II. Abdülhamid'in Uzak-Doğu'ya Gonderdiği Ajana Dair”, *Birinci Millî Tariholoji Kongresi*, İstanbul,

1989, s. 323-325.

- (12) 日本のイーベルーマ政策による中國や印度への侵略について
べく Office of Strategic Services, Research and Analysis
Branch, *Japanese Infiltration among Muslims in China*, O.
S.S.R & A 890.1, 15 Mayıs 1944 に記述が見られる；實際
の日本によるU.S.M.I.D, Military Intelligence
Department, *Records of the Military Intelligence Division
Regional File Relating to China 1922-1944*, Microfilm,
Roll 13, 政務省外務省文庫『日本邦』於ケル宗教及布教闇
係雑件 回教関係』第11卷、五四-六〇頁。回教の文
書として Pan-Islam のタームドハイギリベ園のノート
『Public Record Office, F.O 371/28032, Japanese Intentions in Moslem Countries, 21 June 1941 』を参照。
- (13) 口ハトのイーベルーマ教徒に対する日本が文化団体を使
つて影響力を及ぼすへんじだりするにこつけ、Office of
Strategic Services, Research and Analysis Branch, *Japanese Infiltration among Muslims in Russia and her Borderlands*, O.S.S.R & A 890.2, August, 1944, p.33-37; Public
Record Office, F.O 371/28032, *Japanese Intentions in Moslem Countries*, 21 June 1941 を参照。
- (14) Office of Strategic Services, Research and Analysis
Branch, *Japanese Infiltration among the Muslims throughout the World*. O.S.S.R & A 890, 1943, p. 6.
- (15) 大隈組閣主義の日本がヨーロッパ列強から解放され
るに至る根柢の下に統一思想がある思想である。これ
はアルマジド活動した頭山満、畠田良平、黒龍会、元の

他の団体について U.S.M.I.D, Military Intelligence Department, *Leading Revolutionary Groups*, Enclosure no. 2, Despatch no. 588, pp.1-4 に簡単な記述が記されている。

- (16) ハンブルク・アーバトルニアト・トルコ「トルコの時代に日本とオスマント帝国との間にある種の非公式な使節として活動した。彼の生涯、活動については、İsmail Türkoglu, *Sibiryalı Meşhur Seyyah Abdürreşid İbrahim*, Türkiye Diyanet Vakfı Yayımları, Ankara 1997 や、
トルコ語で出版された書籍を提供してくれる。Mehmed Pakso (çev.), *İslam Dünyası ve Japonya'da İslamiyet*, İstanbul, 1987 がイーベルーマのホベヤハ語訳からの現代語翻訳。Ertuğrul Özalp (çev.) *Alem-i Islam ve Japonya'da İslamiyetin Yayılması*, İstanbul 2003 が、ペクベーに纏め最新のトルコ語訳。小松香織・久野訳『ジャボンヤ』第11書籍、一九九一年は日本滞在時の部分の邦訳。坂本勉「山岡光太郎のメシカ巡礼」、「トルコ・ベーグル」(池井優・坂本勉編『近代日本トルコ世界』勁草書房、一九九九年所取)、坂本勉『イーベルーマ巡礼』(波書店、1999)、Yamaoka Kotaro and Abdürreşit İbrahim, "The First Japanese Hadji Yamaoka Kotaro and Abdürreşit İbrahim", in Selçuk Esenbel and Inaba Chiharu (ed.), *The Rising Sun and the Turkish Crescent*, Boğaziçi University Press, İstanbul, 2003 が昭治末期、最初に来日した後、山岡光太郎が連れだしてベーグル巡礼に行つた際の旅行について考察している。なお、ゆえゆえ帝国ロシア臣民であったアブデュルレヒト・イブラヒムは、一九一二年オスマント帝国の国籍を取得した。

しゃー、一九三五年八月八日、後述するハリスルル共

和國から国籍を剥奪された。

- (17) 大蔵義は周知のとおり一九三一年五月一日田の事件で囚禁された。

- (18) Abdürreşid İbrahim (çev: Ertuğrul Özalp), *Alem-i İslam ve Japonya'da İslamiyetin Yayılması*, İstanbul, 2003, s. 614-619; Selçuk Esenbel, "Islam Dünyasında Japonya İngesi: Abdürreşit İbrahim ve Geç Meiji Dönemi Japonları", *Tophumsal Tarih*, sayı 19-20, 1995, s. 23.

- (19) 壮共トハトシノペーネ口係諸民族に比ぐレモウ教育がおる、裕禰やあいだタタール人は商業に従事し、トルキベタン地方に広く今ハリトマセイハス、日本に近いところに住んでいた。ハリトマセイハスが裕禰ジ日本に対し彼が“が影響を及べねりハヤドヤハス敵因じたハ”。

- (20) Public Record Office, F.O 371/3287, p.440 が一九一八年八月一日の秘密録。Public Record Office F.O 371/4005 が一九一〇年六月一日の監視録。

- (21) Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, *Japanese Infiltration among Muslims in Russia and her Borderlands*, O.S.S. R & A 890.2, August, 1944, pp.

80-82.

- (22) Mahmut Tahir, "Haylar'daki Türk-Tatarların Dini ve Milli Cemiyeti", *Kazan*, no : 11, Yıl IV, 1974, s. 35.

- (23) İnayetullah Akçora, "Mukden Şehrindeki Tatarların Dini ve Milli Cemiyeti", *Kazan*, no : 7-8, Yıl II, 1972, s. 97.

- (24) Mahmut Tahir, "Mançurya Şehrinde Türk-Tatar Cemi-

yeti", *Kazan*, no : 16, Yıl V, 1975, s. 25.

- (25) Mahmut Tahir, "Uzak Şarkta Dini-Milli Cemiyetlerimiz", *Kazan*, no : 14, Yıl V, 1975, s. 41.

- (26) Olga Bakich, "Emigre Identity: The Case of Harbin," *The South Atlantic Quarterly*, 99-1, 2000, pp.51-73; Elena Chernolutskaya, "Religious Communities in Harbin and Ethnic Identity of Russian Emigres", *The South Atlantic Quarterly*, 99-1, 2000, p.79-96.

- (27) 日本に住みハレムベシなハル口係の人たれヒテの研究は、元せむ多へはな。ハレムした研究のなかで指摘されてるハリムサ、一九一〇年代以降トルコ系の人々が日本にやつて来たトコベリムである。しかし、横浜にある外国人墓地にはせハモラとした来歴は記されてこないやのの一九一九年に亡くなハバシユキール・トルコ人の墓がある。これは私が一九〇一年に日本で調査をした際に見つけたものである。ハバシールといふハル口係の人たちの来日は一九一九年、あるいはそれ以前にハラのゼルハルハドムスと書かれてる。

- (28) ムハメト・ハビブ・カレバントリ・ムハンマドAbdulhay Kurbanali (Kurbanaliyev 1889-1972) が、帝政ロハト領トランシルビア州内のチハニヤン Celyabi (Çelyabinsk) に生まれた。バルコニヤールのバルン=タハハ族の出身で、父親のウグイム・ウサマー・イッサン・Ubeydullah İsan が、ミダヤク村 Midyat köyü 出身の裕禰なモハメトである。来日する前はバシヨクルディスタンにねこり帝政ロハトのシャーフを支持する正党派として民

族主義者たちに対し敵対的な行動をとった。一門と彼自身が有する宗教的声望によって周囲から私兵を集め、軍を編成し、コルチャーケ将軍の反革命軍に身を投じた。後にアタマン・ゼミヨーノフの麾下に入り、極東地方に転戦した。父親とその息子は、一九一七年五月一一一日にモスクワで開かれた全ロシア・ムスリム・クリルタイで読まれた糾弾書において民族的、宗教的背信を問われ、断罪された。これらの事情とクルバン・アリーについては以下の書を参照のこと。³²⁾

Zeki Velidi Togan, *Hatıralar*, Ankara, 1999, s. 142, 172, 176, 189, 190; Mahmut Tahir, "Muhammed Abdulhay Kurbanali", *Kazan Dergisi*, Yıl III Sayı 9, 1972, s. 50; İhsan İlgar, *Rusya'da Birinci Müslüman Kongresi*, Ankara 1990, s. 505-506.

(29) Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, *Japanese Infiltration among Muslims in Russia and her Borderlands*, O.S.S.R & A 8902, August, 1944, p.26.

(30) イデイール＝ウラル問題のリーダーであるアヤズ・イスバキーが極東にやつてくると、クルバンアリーの指導性にかぎりがあらわれるようになる。この点については松長昭「アヤズ・イスバキーと極東のタタール人口」³³⁾ ティ（池井優・坂本勉編『近代日本とトルコ世界』勁草書房、一九九九年所収）一一一六七頁を参照。

(31) 外務省外交史料館『在本邦』於ケル宗教及布教関係雑件 回教関係 第一卷、一一一頁。この史料を読むにあたっては当時、慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程

在学中の石原賢一氏、同修士課程学生稻葉沙智子氏、高丸洋亮氏の助力を賜つた。心からお礼を申し上げる。なお、クルバンアリーは、後になつてこの建物を売却しようとすると、これに反対するタタール人たちとの間で訴訟問題が起つた。

(32) 開校式に列席した来賓のなかには総理大臣犬養毅の他に内務、法務の元大臣、二〇人ほどの陸海軍の将校、三〇人にのぼる国會議員がいた。また日本の国粹主義者の父として頗る頗る満洲の開校式に列席した。³⁴⁾ 詳しへは Tokyo'da Mektebi İslamiye'nin On Yıllık Hatırası: İçin Düzeltilmiş Resimler Mecmuası, Tokyo 1937 を参照された。

(33) ムルコから購入されたアラビア文字の活字は、箱に詰めて日本に送られた。支払わなければいけない関税が相当額に上つたので、大養毅は余期中の国会に申請してその一部を補助する承認を取りつけた。また、これは別に印刷機を購入する代金として当時の金で五〇〇円が寄附された。³⁵⁾ のあたりの事情については Mahmut Tahir, "Tokyo'da Matbaa-i İslamiye", *Kazan*, sayı 16. Yıl-V, 1975, s. 16-17 に記述がある。

(34) 書籍とともに宣伝目的をもつて絵葉書、地図が印刷され、海外に送られた。印刷所で刷られた書籍、手紙、請求書、絵葉書、送り状は、現在、ほとんど個人の私蔵に帰し、公開されていない。イスラーム印刷所 Matbaa-i İslamiye がつくられるまで極東におけるトルコ系住民の社会的、文化的な中心は、満州のハルбинであった。極東における最初のトルコ＝タタール印刷所はこの町で設立

スル、Yirak Sark, Min (Bin) Yil Mescidi, Beyrem Nuri, Çatki
トルヒタ新聞が多くの本ムスリムを登場され、トルコ＝タ
タル社会のなかで有用な情報を提供してこだ。

(35) 内務省警保局編『外事警察概況』第一卷、不二出版社、
一九八七年、一五九頁。

(36) 神戸モスクの開堂については外務省外交史料館『在日本
邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 回教関係』第1卷、1
九六一—六頁、および The Kobe Muslim Mosque Report
1935-36, 30 th April 1936; *Japan Chronicle*, 12 th October
1935; Public Record Office, British Foreign Office, FO.
371/19349, 1935, p.154-201 を参照。

(37) 既開設に遡りて行なれた祝禮には The Kobe
Muslim Mosque, A Souvenir Booklet Issued in Commemo-
ration of the Opening Ceremony of the Kobe Muslim
Mosque, October 1935 が紹介がある。

(38) Mian Abdul Aziz は、一九〇六年に設立された全マハ
メ＝バシリカ連盟の第23代会長である。彼は神戸モスク
の開堂をきっかけにイスラームが日本の庇護の下で新
たび発展するに貢献した。The Crescent in the Land of
the Rising Sun, Blades East & Blades LTD, 1939 を翻訳した。

(39) 内務省警保局編『外事警察概況』第1卷、不二出版社、
一九八七年、一五〇頁。日本政府は直接ではなかったが、
間接的に財政支援を行ふ、モスク建設に協力した。たと
えば二三歳財閥傘下の十一の企業に働きかけてそれぞれ当
時一万円の寄附を募り、集められた総額十一万円にのぼ
る寄付金はクルバンアリーに渡され、工事費用にあてら

れた。ハネディエベイは外務省外交史料館『在日本邦ニ於ケ
ル宗教及布教関係雑件 回教関係』第1卷、110回画; Re-
cords of The U.S Department of State Relating to the In-
ternal Affairs of Japan 1930-1939 SJ.1 Decimal File 894,
894.404 / 16, *Japan and Mohammedans*, 22. June. 1938;

Abu Bakr Morimoto, *Islam in Japan, its Past, Present and
Future*, Tokyo, 1980.

(40) Public Record Office F.O 371 / 28010, Positions of
Mosques in Japan, 9 April 1941; 外務省外交史料館『在日本
邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 回教関係』第1卷、1
八九頁。

(41) ただし、ソウジの志津の遺産をも含む Kadınefendileri (聖帝
の妻)、Hanusultan çocukları (聖帝の娘の子)、Şehzade G
ülşaherlerin (聖帝の娘の夫)、Sultanzade çocukların (聖帝の娘の子)
ハフザーハの娘の子供たる) は除外された。以上の件は
闕レバ、Murat, Bardakçı, Son Osmanilar, Osmanli
Hanedanının Sürgün ve Miras Öyküsü, Gri Yayınları,
İstanbul 1991, i; Kanun no: 5371, Kabul Tarihi: 18.04. 1949,
Resmi Gazete ile Yayın ve İlan: 25.04.1949-Sayı: 7190,
Vatandaşlık Kanununa Bazı Maddeler Eklenmesine Dair
Kanun; Kanun no: 5958, Kabul Tarihi: 16.06. 1952, Resmi
Gazete ile Yayın ve İlan: 23.06.1952-Sayı: 8142, Hilafetin
İlgasına ve Hanedan-i Osmani'nin Türkiye Cumhuriyeti
Memaliki Harçına Çıkarılmasına Dair Olan 431 Sayılı
Kanun 2. Maddesinin Değiştirilmesi ve Aynı Kanuna
Bazi Maddeler Eklenmesi Hakkında Kanun; Kanun no:

1803, Resmi Gazete ile Yayımlan: 18.05. 1974, Cumhuriyetin 50. Yıl Nedensel Bazi Suç ve Cezaların Afiş Hakkında Kanunun 8. Maddesi ^{を参照}。なお、女系皇族は一九五一年六月一六日付けの法律、男系皇族は一九七四年の大赦令によりヘルツに戻る権利を与えられたといふを付け加えておいた。

(42) *Schzade* とは皇帝の息子の尊称であるとともに皇位に

(43) カリフ・アブデュルメジド・ヒュエンディ (Halife Abdülmecid Efendi) は、第32代皇帝アブデュル・アジーイの皇子で一八六八年に生まれた。最後のオスマン帝国皇帝メフメト六世ヴァヒデッティン (VI. Mehmed Vahidettin) が国外に追放されたあと、一九二一年カリフに選出された。一九四四年にパリで客死した。

(44) アブデュルメジド・エフエンディが當時駐パリ・トルコ大使であつたアリ・フェトヒカリフ位再興の提案があつたないと私的に伝えたないと“Halife Abdülmecid

Efendiye İngiliz ve Fransızların Gizli Teklifleri”, *Tarih Konuşuyor*, Şubat 1964, c. I, sayı I, s. 61-65

(45) Omar, Khalidi, "Hindistan'da Osmanlı Sultanları," *To-*

פְּנֵי צָהָב וְעַמְּקָמֶת בְּבִנְיָמִינָה

セルマリー・ハーヌムスルタンは皇族が国外追放に処された後、母のハティジエ・スルタンとともにフランス委任統治下にあつたレバノンに行き、ベイルートに住んでいた。ネパールの藩王との婚姻が行われたのはこの後の

ルルである。結婚生活は結局、うまくいかず、離婚して
パリに行き、貧窮のなかで亡くなつた。彼女の波乱の人生について後に娘でジャーナリストであるケニヤ・ムラト Kenize Murat が *De la part de la Princesse morte*, Paris, 1987 (トルコ語 *Saraydan Sürge*, (çev: Esin Çelikkan), İstanbul, 1990) として小説の形で発表された
二八〇。

(47) ハトメド・ネシハヤー (Fatma Neslişah) が、ムハンマド・アッブド・アブデル・モネイム (Prens Muhammed Abd el Moneim) や、ザヒーラー・ベハチット・ハヌタハ (Zehra Hanzade Sultan) が、ハトメド・アッブド・アブデル・モネイム (Prens Muhammed Ali ibrahim) や、ネクレハ・ベイズ・トルトゥカハ・スルタハ (Neciba Heybetullah Sultan) や、ヌル・アムル・イブトムル (Nebil Amr Ibrahim) や、それらが記載したのがわかる。あわせて、(48) Murat Bandakçı, *Son Osmanlılar*, İstanbul, 1991, s. 37; なども、

<http://freepages.genealogy.rootsweb.com> にあります
この情報が載っています。

(49) T.C Başbakanlık Devlet Arşivleri, Cumhuriyet Arşivi,

Arnavutluk Kralı Zago'nun kızkarde şile II. Abdülhamit'in oğlu Abidin'in düğümleri ile ilgili Tiraz gazetesinde çıkan

yazilar. Tarih: 14 / 2 / 1936, Dosya: 244232, Fon Kodu: 301000 Yer №: 20338713

(55) T.C Başbakanlık Devlet Arşivleri, Cumhuriyet Arşivi,
İngiltere'nin teşvikiyle Haydarabat Nizamının kızın hanedanı

mensuplarına vermek için yaptığı girişimler, Tarih: 11/6/1933, Dosya: 244211, Fon Kodu: 30.10.0.0, Yer No: 203.386.14; *Hindî prenslerle evlenen sakit hanedan mensuplarının Hindistan'a gitmeden Misra' ugrayacaklarının haber alındığı*, Tarih: 10/12/1931, Dosya 244195, Fon Kodu 30.10.0.0, Yer No: 203.385.18.; *Hindistana hareket eden Gandhi ve Hintlilerle evlenen sakit hanedan mensuplarının durumları hakkında alınan haber*, Tarih: 29/12/1931, Dosya: 244196, Fon Kodu: 30.10.0.0, Yer No: 203.385.19.

(51) Great Britain, Foreign Office, Index to Green Secret Papers for the Year 1933, E 7890/7890 44, *Plot of Prince Mahmud Shankat Seif-ed-din to Overthrow Present Regime: H.M.G.'s support asked*. 1933; E 5030/5030/44, *Prince Mahmud Shankat Seif-ed-din: Plot to secure re-establishment of Sultanate in Turkey*, 1934. ハム・ムハマド・セイフ・エドゥン (Mahmud Şevket Efendi) 一族の一人が、一九一八年にカット・ト・トクツルムスリムの艦隊を攻撃した。(52) Kadir Misirlıoğlu, *Osmanoğulları'nın Dramı*, Sabil Yaynevi, İstanbul 1990, s.301.

(53) Murat Bardakçı, *Son Osmanlılar*, s.55.

(54) Yılmaz Özlu, *Devletler ve Hanedanlar Türkiye (1074-1990)*, Kültür Bakanlığı Yayınları, c. II, Ankara 1996, s.325.

(55) ジャーナルの題名が「アーバー・アーヴィング著『19世紀の英國』」である。

(Mehmed Abid Efendi) ジュト・トルマルケーリ・ムヒメド・アブドゥルケルミン・エフェンジ (Abdülkerim Efendi) ルー・トルサルの直属の下の軍事顧問官として、彼の11人の直系子孫が歴任してゐる。 (56) Andrew D.W. Forbes, *Doğu Türkistan'daki Harp Beyleri*, (Dolu Türkistan'ın 1911-1940 arası Siyasi Tarihi), (翻訳: Enver Can), Doğu Türkistan Vakfı Yayınları, İstanbul 1990, s.198.

(57) ジュート・トルサル次の艦隊参謀: Andrew D.W. Forbes, *Doğu Türkistan, İstanbul 1990*; Lars Eric Nayman, *Great Britain and Chinese, Russian and Japanese Interests in Sinkiang 1918-1934*, Malmö 1977. 中国艦隊が使った支那艦隊の日本艦隊の母艦であると記載されている。 (58) *Yeni Milli Yol*, Berlin, Mayıs, 1934, Yıl 6, Sayı (76) 5, s. 38-39; T.C. Başbakanlık Devlet Arşivleri Cumhuriyet Arşivi, Berlin'de Yayılanan Yeni Milli Yol Gazetesiinde Çıkan Doğu Türkistan'da Kiyam Adlı Yazı, Dosya: 3. Büro, Fon Kodu: 490.1.0.0 Yer No: 609.111.17, 文書館は戦闘記録を記載している。 (59) ジュート・トルサルの艦隊参謀の前記の艦隊のCemal Pashaが、Cemaleddinの名前で記載されている。 *Yeni Milli Yol* 所収の艦隊を現代英語訳文に翻訳したのがそれである。文を現代英語訳文に翻訳したのがそれである。文を現代英語訳文に翻訳したのがそれである。文を現代英語訳文に翻訳したのがそれである。

(60) ジュート・トルサルの艦隊参謀の前記の艦隊のCemal Pashaが、Cemaleddinの名前で記載されている。文を現代英語訳文に翻訳したのがそれである。

pers for the Year 1934, E 1899/1899/44(file), 1934 に 相
及ぶれてる。

(60) 外務省外交史料館『在本邦ニ於ケル宗教及布教關係雜
件 回教關係』第三卷、五〇一-五〇二頁。なお、ハの史
料の讀解にあたつてはアンカラ大学講師杉山剛氏の力添
えを得た。ハハジ記して感謝した。

(61) ハの人物は一九三三反乱時の司令官の一人マフム
ト・ムヒティ (Mahmut Muhiti) の可能性が高。反乱

が鎮圧された後、新たな指導体制を敷いて体制の立て直
しをはかったが、一九三七年四月暗殺の危険を察知し、
側近の部下をもじり「逃亡」した。イハシ・スザン
・ムヒティ (Mahmut Muhiti) はその後日本に渡った。マフムト・ムヒティは
日本占領の北京で、兄のムスル・ムヒティは一九四四
年東京で亡くなった。彼の墓は多磨霊園内のタタール人
墓地にある。その所在について教示され、多くの問題に
ついて助言を賜った東京トルコ人協会々長テハーダル・
ムヒティ氏に深甚の謝意を表した。マフムト・ムヒティ
のこの謹へせ M. Ali Taşçı (derleyen), *Esir Doğu Türkisi
stan İçin, Isa Yusuf Alptekin'in Mücadele Hatıraları*, İstan-
bul 1985, s. 285, 322-334, 384-385 を参照のこと。

(62) ハベマハ帝国副相の事務官のYılmaz Öztuna,

Devletler ve Hanedanlar Türkiye, c. II, s. 280-424; An-
thony Dolphin Alderson (çev. Şefaiettin Severcan), *Bütün
Yöneriyle Osmanlı Hanedanı*, İstanbul 1999, 289-299;
Murat Bardakçı, *Son Osmanlılar*, s. 195-203 を参照。ハ

ルプリキ (İsa Yusuf Alptekin) の回顧録は一九三八年
米ハグベリエト・マフムト・ムヒティ (Mahmud
Ekrem Rıza) による本名のオスマントルコ族を名乗る人物の公
式ノートが記載されてる。しかし、彼の人物の眞偽
性については疑問がある様である。ハの件について
M. Ali Taşçı (derleyen), *Esir Doğu Türkistan İçin, İsa*

Yusuf Alptekin'in Mücadele Hatıraları, İstanbul 1985, s.
340-342 を参照。

(63) Great Britain, Foreign Office, Index to Green Secret
Papers for the Year 1935, P 4525/1/150, Prince Ali and
Prince Ekrem: proposal for a Moslem Weekly Journal, L'Ac-
cueil Musulman, 1935.

(64) Kadir Misirloğlu, Osmanoğulları'nın Drama, s.394.

(65) Great Britain, Foreign Office, Index to Green Secret
Papers for the Year 1935, *Visit of Prince Bahaddin Samy
to Malaya : Visa*, E 6349/E 7416/3868/379.

(66) メハメト・トルク・ムヒティ (Memed Abid
Efendi) は、一九〇五年トルコ・チャバチ出世した。
軍人としての教育を受けた後、下士官に任命された。ト
ルコを離れた後パリ大学法学部、東洋語学校ペルシア語
科を卒業し、一九七一年ペルームで没した。隣はタマ
スクスのスルタン・ヤツバ・サスクの廟内にある。

(67) Yılmaz Öztuna, *Devletler ve Hanedanlar Türkiye* c. II, s.
335-336. ただし、Öztuna は皇子が長く間放置されたため
死んでしまった。ハスリ一九三九年一九四〇年に死んだとの
母の言を取引ながらだと翻訳する。M. Metin Hülagü,

Sultan II. Abdülhamid'in Sürgün Günlüğü, Hususi Doktoru

Ayşe Hüseyin Bey'in Hatıratı, İstanbul, 2003, s. 559; Meydan Larousse, Abid Efendi maddesi, İstanbul, 1990, c. 1, s.

42 ページ目。

(68) Misirlioğlu, Kadir, *Osmanoğulları'nın Drama*, Sebil Yaynevi, İstanbul 1990, s.356.

神の回覆魔術によるセイントセラフの翻訳。Ayşe Osmanoğlu, Babam Sultan Abdülhamid (Hatıralarım), İstanbul 1986;

Sadiye Sultan, *Hayatının Aci ve Tatlı Günlüğü*, İstanbul, Tarihsiz; Mehmet Ferit Ulusoy, *Hanzade, Sürgünde Bir Şehzadenin Günlüğü*, İstanbul 2003; Nahid Sirri Örik (hazırlayan: Alpay Kabacalı), *Bilmeyen Yaşamlarıyla Saraylılar*, İstanbul 2002; Ömer Faruk Yılmaz, *Sultan Abdülhamid Han'ın Harem Hayatı*, İstanbul 2002; Halid Ziya Uşaklıgil, *Saray ve Ötesi*, İstanbul 1965. Murat Bardakçı, *Şahibabası Osmanoğulları'nın Son Hükümdarı VI. Mehmed Vahideddin'in Hayatı, Hatıraları ve Özel Mektupları*, İstanbul 1998, Yıldız'dan Sanremo'ya, İstanbul, 1999.

(69) Kadir Misirlioğlu, *Osmanoğulları'nın Drama*, s.365.

(70) Yılmaz Öztuna, *Devletler ve Hanehanalar Türkiye*, s.328.

(71) İbid.

(72) Kadir Misirlioğlu, *Osmanoğulları'nın Drama*, s.366.

(73) *Savul Ahır Gazetesi*, 16 Ağustos 1935. ページ目
「中国から日本へ渡る船の乗組員が死んでしまった」という事件を報じた記事。

Misirlioğlu, *Osmanoğulları'nın Drama*, s. 366 にこの件を記載している。

42 ページ目。

お。の。

(74) Great Britain, Foreign Office, Index to Green Secret Papers for the Year 1933, *Prince Selim: repatriation of his son from India*, E 6019/1309/65, 1933.

(75) Meydan Larousse, Abdülkerim Madde, İstanbul, 1990, c. 1, s. 34.

(76) マハムマ・チャペルホールに闇やみ情報は、現在トメリカ在住の子息ハーメル・チャペルホール (Cüneyt Çapanoğlu) がいる。情報提供の助言を貢献しただ

(77) 1100 1月 10 日木曜日のシナネート氏からの書簡によると、

(78) 外交史料館『外国新聞記者、通信員関係雑件』(1933年)
人へ編』昭和八年 1-110 頁。

(79) 前掲書、四-六頁。

(80) 外務省外交史料館『在本邦に於ケル宗教及布教関係雑件 回教関係』第一卷、111 頁。アブデリュケリバが来日した口述によれば東京で発刊された『Yeni Yapon Muhbir』(Türlü Haberler", Sayı 7, 25 Haziran 1933, S. 44-45-46; 田中松山氏の「トルコカルカラム擁立運動と新疆ムスリムの動向」(神田信夫先生古希記念論集 清朝と東アジア』山川出版社、一九九一年、1111九頁) にねじて来日した時期を回収口述してある。

(81) 外務省外交史料館『在本邦に於ケル宗教及布教関係雑件 回教関係』第一卷、110 1 頁。

- (82) 外務省外交史料館『在本邦ニ於ケル宗敎及布教關係雜件 回教關係』第一卷、一八九—一九〇頁。
- (83) 田中宏巳、前掲論文、一一一七—一五二頁。
- (84) 田中宏巳、前掲論文、一一一八頁。
- (85) 田中宏巳、前掲論文、一一一九頁。
- (86) 実川時次郎は有名な国粹主義の政治家平沼騒一郎の私設秘書を務めていた人物である。
- (87) 小林不二男『日本イスラーム史』日本イスラーム友好連盟、一九八八年、八〇—八一頁。
- (88) 田中宏巳によると、小畠敏四郎に近い小磯國昭が後に閩東軍の情報部長に就任するに至りの計画が実行に移わたった。
- (89) *Yeni Yapon Muhibiri*, "Türk Haberler", Sayı 7, 25 Haziran 1933, s. 44. じの記事を現代トルコ語に訳して貰ったスベーヘン・トクバハムは感謝する。
- (90) *Yeni Yapon Muhibiri*, "Tokyo Asahi Gazetesiinin 10 Eylül Nüshasından", Sayı 10, 23 Eylül 1933, s. 40.
- (91) ルートヴィルケーヴサ根井在住のタタール人ノルトベリニアの金江田〇〇田が病死した。
- (92) *Yeni Yapon Muhibiri*, "Tokyo Asahi Gazetesiinin 10 Eylül Nüshasından", Sayı 10, 23 Eylül 1933, s. 41.
- (93) *The China Weekly Review*, 21 October 1933, p.322.
- (94) 小林不二男『日本ベーリー坂』日本ベーリー友好連盟、一九八八年、八一頁。
- (95) 田中宏巳、前掲論文、一一一九頁。
- (96) Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, *Japanese Infiltration among Muslims in China*, O.S.S.R & A 890.1, 15. Mayıs. 1944, p.116.
- (97) *The China Weekly Review*, 31 March 1934, p.167.
- (98) *The Times*, 6 April 1934, p.11.
- (99) *The Times*, 4 April 1934, p.11.
- (100) *Le Temps*, 4 Avril 1934.
- (101) *The China Weekly Review*, 5 May 1934, p.382.
- (102) "Şarkı Türkistanda Teşekkül Eden Cumhuriyet", *Vakit*, 22 Ocak 1934; "Ortada Bir Entrika Kokusu Var", *Vakit*, 22 Ocak 1934.
- (103) "ソルカルマニヤニカニヤベリーナ教徒のソルカルマニヤニヤ" Andrew D.W. Forbes, *Doğu Türkistan*, s.223.
- (104) 小林不二男『日本ベーリー坂』日本ベーリー友好連盟、一九八八年、八一頁。
- (105) "Death of a Turkish Prince", *The Times*, London, 5 August 1935, p.12.
- (106) "Prince Takes Life in New York", *North-China Daily News*, 5 August 1935, p.1.
- (107) "Prince of Turkey Ends his Life Here", *North-China Daily News*, 4 August 1935, p.21; "Death of a Turkish Prince", *The Times*, London, 5 August 1935, p.12.
- (108) "Prince, Suicide Here to Get Royal Burial", *The New York Times*, 7 August 1935, p.10.
- (109) "Rites for Turkish Prince", *The New York Times*, 11 August 1935, p.26.
- (110) *Ulus*, 5 Ağustos 1935.

(112) *Cumhuriyet*, 5 Ağustos 1935.

(113) Yılmaz Öztuna, *Devletler ve Hanebanlar Türkiye (1074-1990)*, Kültür Bakanlığı Yayınları, Ankara 1996, c. II, s.

328.

(114) ムタリクルケリムに関係する貴重な情報を提供していただきながらムハンマド・オスマン氏に多大の謝意を表した。